

クローズアップ NGO・NPO

認定NPO法人

日本ブルキナファソ友好協会 同じ地球の仲間として…、私たちにできること!



↑個人スタディツアーで村を訪問する参加者

「日本ブルキナファソ友好協会」とは?
日本ブルキナファソ友好協会（以下、JBFA）は、一九九五年、西アフリカの内陸国「ブルキナファソ」において、貧困・病気に苦しむ人々を救済するため、ブルキナファソ政府の要望に応え設立されたNGOで、「同じ地球の仲間として：私たちにできること―」を合い言葉に、教育・医療・保健衛生・農業の分野で、国際協力の活動に寄与することを目的とし援助活動を続けている、認定特定非営利活動法人（認定NPO法人）の団体です。

一九九九年三月二十九日、神奈川県下では最

初のNPO法人として登記。（現在は千葉県に移転）

二〇〇三年六月二〇日、全国で二三番目の認定NPO法人に認定されました。

もう一つの顔

JBFAは、単なるNGOとしてではなく、両国間の友好協会として、相互理解と友好親善促進への機運に応え、両国の関係諸機関・諸団体と連携しつつ、両国間の友好協力の媒体として独自の役割を果たし、日本とブルキナファソの懸け橋となって協力しております。両国の新しい豊かな友好関係は、ブルキナファソの人達と深い信頼関係で結ばれることで、両国が一緒に発展していくことが可能となるでしょう。われわれは、責任と自覚を持って、ブルキナファソの一人でも多くの人々が貧困や病気の苦しみから解放され、安心した生活を営めるよう祈念し活動を続けております。

JBFAの主な活動

ブルキナファソでは、農村開発が主の活動で、これまでパスツール研究所（フランス）と協働で六カ所の診療所を建設、三カ所の小学校建設、ネリカ米（New Rice of Africa）の稲作、二八カ所の井戸掘削、日本で使わなくなった学校用機といす五二〇〇セット、救急車などの車両七台などを輸送、有効活用するなど、幅広い援助活動を展開しており、その活動は内外共に高く評価され

認定 NPO 法人 日本ブルキナファソ友好協会

〒270-1412 千葉県白井市桜台2丁目6番3-404号

TEL 047-498-0302

FAX 047-498-0304

e-mail : office@jbfa.org URL : http://jbfa.org

ユニークな個人スタディツアー

ております。
日本では、二〇〇八年五月に横浜で開催された第四回アフリカ開発会議（TICAD IV）で注目を浴びた、奇跡のコメと呼ばれるネリカ米の稲作を、五年前から小学校の児童と共に育てています。児童達は、このネリカ米の稲作を通して、国際協力のあり方、食糧事情などを学んでおり、また、毎年二月にはブルキナファソ大使を招いて収穫祭が開催され、食文化の交流なども行っています。現在、このネリカ米は一五の教育・研究期間（各都道府県）で栽培されるようになっています。



↑白井市で栽培されているネリカ米の収穫

「将来は国際協力にかかわる仕事をした
い」、「アフリカには行ってみたいけれど二人
でいきなり行くのはちょっと…」そんな方
にぴったりのスタディツアーをJBFAでは
ご用意しています。貧困、エイズ、紛争、さ
まざまな問題が山積するアフリカに、世界の
注目が集まっており、国際協力を志す人に
とってアフリカでの経験は貴重な財産となる
ことでしょう。その一方で、音楽、ダンス、
陽気な人々…、一度その地を訪れると「とり
こ」になる、そんな魅力がアフリカにはあり
ます。

西アフリカの内陸国ブルキナファソは「も
てなしの国」と言われ、紛争もなくのんびり
とした国で、最初にアフリカの地を訪れるに
は最適な国と言えるでしょう。また、この個
人スタディツアーは参加者自身がプログラ
ムを作るところに特徴があり、NGOの「現
場」を実際に体験できる貴重な機会となっ
ております。JBFAの業務にかかわったり、
現地NGO、欧米系NGO、および国連機
関、JICA、病院、小学校、孤児施設、障
害者施設などへの訪問、そして現地の人々の
「現場の声」を聞くことができます。JBFA
では、二〇〇四年から個人スタディツアー
を開始し、毎年二〇人以上の方々を送り出
しています。また、現地の駐在スタッフがマ
ンツーマンで共に生活をしますので、誰もが
安心して参加することができます。

住民は貧しいけれど、活気があり生き生
きとしています。子ども達も同様で、われわ



↑建設された公立小学校の開校式

れはその素敵な笑顔に元気をもらい、何度
となく助けられることでしょう。
時の流れがゆつくりと肌に感じるアフリカ
の大地。温かいもてなし、笑顔、人を思いや
る心、家族への愛…、古きよき時代へのタイ
ムスリップは、忘れていた人の心を想い出さ
せてくれます。
多くの人々が魅せられた「ブルキナファ
ソ」では、あなたの訪問を歓迎、お待ちいた
しております。
※ブルキナファソに関しての詳しい情報は
ホームページをご覧ください。査証申請書
のダウンロード（大使館承認）をはじめ、
一〇〇〇枚以上の写真掲載など、情報量は
日本一を誇ります。

クローズアップ

NGO・NPO

特定非営利活動法人

希望の学校

アフガニスタンの平和を目指して—希望の学校

女性と子どもたち

アフガニスタンでは、一九七九年から二〇年以上内戦が続きました。戦争が終わって多くの国々の援助のもと国の再建と復興が進められています。が、七年たった今もお、人々は食糧難と電気や水の不足により苦しい生活を強いられています。ソ連の侵攻が生んだ長く激しい戦争で国土は破壊され、農業の基盤が崩れ、産業復興の見通しはなく、代わりにケシの栽培やわいろがはびこっています。まともな仕事がないため失業率が高く、家族を養うために子どもをたった五〇〇ドルで売ったり、自爆テロを起こしたりする人が増えています。また女性も、伝統的な習慣や間違った宗教的な解釈、貧困や戦争によって、教育の機会を奪われてきました。そのため、憲法で女性の教育が義務になっても実際には二〇%の女性しか教育を受けてきませんでした。また学齢期を過ぎた女性は入学することができず、その結果、未だに成人女性の二〇%しか読み書きができない状態です。戦争で亡くなった子どもを抱えながら親戚に頼ったり物乞いをしたり、幼い子どもたちは家族を助けるため、学校へ通わずに働いています。路上で働いていた一〇歳の女の子は同年代の子と異なり遊んでみたいと言いません。二歳の男の子は、一度でいいから普通に学校に通ってみたいと夢を話してくれました。これも戦争が残した悲しい現実です。

一六歳以上の女性の学校を設立

こつした子どもたちの夢を叶えるためには、子どもが働かなくてすむ社会にしなければなりません。その実現のために、二〇〇二年NGO「希望の学校」を立ち上げ、二〇〇三年一〇月にはカブールに生徒六〇人と先生四人の学校「KIBOU」を開校しました。家族を十分に食べさせ、安心して働ける社会にすることを目標に女性に読み書きと裁縫を教える学校です。

これまで一六〜四四歳の五八〇人以上の女性がここで学び、学ぶ喜びを知って自信と誇りを持ち始めています。このうち、中学・高校へ進学した者二〇人、ほかのNGOの学校で洋裁を教える者八人、洋裁で収入を得る者が一〇人以上います。五人が「KIBOU」の先生になりました。

「KIBOU」の特徴

現在「KIBOU」は、インフレによる家賃高騰のため、毎年別の場所へ移動しなければならぬという問題を抱えています。しかし、カブール中心部から次第に郊外へ移転しましたが、学校のなかつた地域の女性たちに歓迎されています。今年も一七〇



↑KIBOUに併設された保育室で保育士さんの話を聞く子どもたち

(特活) 希望の学校

〒305-0044 茨城県つくば市並木 4-1-419-101 TEL 090-1259-9907 FAX 029-851-3284

e-mail : info_kibou@yahoo.co.jp URL : http://www.kibou-school.org/

人の生徒が入学しましたが、校舎が狭く入りきれないようです。多くのNGO経営の学校が市中心部にあるのに比べて、大変意義のあることだと思えます。また戦争中、国外で難民として暮らしながら学んだ人を招いて編物教室や美容教室を作り、学校の運営資金にするなどの工夫をしています。日本からの送金が遅れることもあり、ここ一年は英語塾やパソコン塾などを開いて資金の一部に当てています。これは私たちが当初考えてもいなかった学校の自立です。

保育士を育てる

アフガニスタンでは四人に一人の幼児が五歳になる前に死亡します。妊産婦死亡率も非常に高く、一〇〇〇人に一六人が亡くなっています(日本の三九〇倍)。理由は清潔な水や栄養の不足もありますが、特に女性の医者、看護婦、助産婦が少ないため、専門家の立ち会う出産が一四%しかないことです。男性の医者を敬遠する女性が大勢死亡します。また一八歳未満の出産が多いことも大きな理由です(一〇〇人に四五人の女性が一四歳以下で結婚を強いられる)。若すぎる母は、衛生の知識も乏しく、子どもを病気で失うことが多いのです。また、母を失った子どもは四人に三人が一歳前に死亡します。このような無駄な死を減らすためには、女性たちが基本的な衛生について学ぶ必要があります。折から二〇〇六年度、JICAと茨城県の「草の根技術協力

事業」の支援を受けることになり、KIBOUの保育担当の女性がつくば市内の保育園で三カ月間研修を受けました。将来はカブル校に保育コースを設け、資格を持った保育士を育てる一方、一般の女性たちにも保健衛生について学んでもらう計画をしています。

洋裁の技術を身につける

洋裁は女性が家で子育てをしながら、また差別を受けることなくできる仕事です。一家を支える未亡人、また、障害を持つ夫や麻薬中毒の夫を抱える女性たちにとって、一日一ドル以下の苦しい生活から抜け出すにはとてもよい仕事です。しかし、生徒の作ったものが売物になるためには、カブル校の先生をプロの裁縫教師に育てなければなりません。幸い、二〇〇七年にもJICAの「草の根技術協力事業」により、カブル校からの研修生二人を招聘することができました。研修生は型紙を使った洋裁を基礎から学び、昼夜、土日を問わずミシンを踏み、三カ月後にはスーツを仕上げるようになりました。研修生は、型紙を使わないアフガニスタン式洋裁と日本の洋裁技術の違いに大変感銘を受けていました。



↑日本式の型紙を使って、裁断を学ぶ

支援プロジェクト最終年の今年は、洋裁技術の勉強と並んで、ダリ語で図入りの教材を作る予定です。また、アフガニスタン女性の体型に合わせた型紙を数種類作ることで、カブル校の洋裁技術の進歩に大いに貢献できると考えています。

今後の取組みと夢

希望の学校を地方に広げ、大学を造り、付属の機織工場と縫製工場を作ることが私たちの夢です。まずは来年から学校を私立学校にして、教育省の支援を仰ぐことを考えています。また、コートとウエディングドレス等を看板にして、学校の運営資金のために販売のルートを作ります。



↑読み書きの教室、幅広い年齢層の生徒達

子どもは、内戦を繰り返してきたアフガニスタンの歴史を変えることができよう。これこそ私たちの大きな夢です。